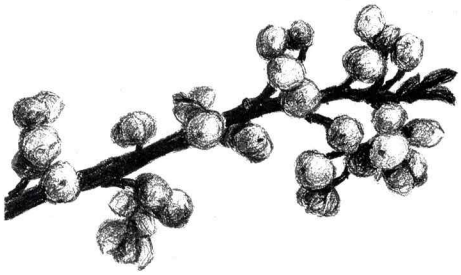
朝日 俳壇 歌壇



〈アオモジⅡ〉　日高理恵子

うたをよむ　花の山姥

長谷川　櫂

俳人の黒田杏子さんが亡くなって十三日で一年が経つ。飯田龍太の故郷・甲州境川（笛吹市）での講演の翌朝、旅館で倒れ、次の日、不帰の人となった。

先月、夫の勝雄さんによって東京本郷の自宅近くの法真寺にお墓ができた。墓碑に刻まれたのは、

花巡るいっぽんの杖ある限り

昨年八月の誕生日に刊行された遺句集『八月』の句である。黒田さんは三十歳の春、花巡礼を思い立ち、日本全国の桜を訪ね歩いた。「花巡る」の句はその五十年後の句である。このときすでに脳梗塞を患い、車椅子を使い、自分の足で歩むことなどできなかったことを思えば、壮絶な悲願の一句である。

黒田さんの胸には若いころ衝撃を受けた遊行上人、捨て聖一遍の面影が生涯宿りつづけていたにちがいない。歩きに歩き、足が止まれば念仏を唱えながら踊る。そうするうちにやがて身も心も呆々として草木や鳥獣や人々と一つになる。

八十の花の記憶の無盡蔵
流離へとなほ呻吟へと飛花落花

おそらく黒田さんは捨て聖一遍の心のままに生きようとしたのだろうし、その切実な願いから黒田杏子の俳句の世界が生まれたのではなかったか。この黒田さんの世界を早々と見抜いていたのがじつは龍太だった。死の二日前の境川での講演は龍太への感謝に満ちていた。

黒田さん死後の朝日俳壇に〈**杏子とふ花の山姥大往生**〉（松村幸一）という追悼句が載った。「花の山姥」という賛辞がふさわしいのはこの人くらいしかいない。本人も喜んでいるだろう。（俳人）

馬場あき子選

指揮棒をたった一本携えて世界に道つけ小澤征爾逝く　（北広島市）前田　真志

大ジャンプ葛西が五十路超えて勝つ衰え蹴とばす技と執念　（習志野市）元杉　紀雄

婆ちゃんを背負い地震を逃げ切った能登の球児を待つ甲子園　（尾道市）大本　和子

友達の結婚報告聞きながらいっぱい笑い一緒に泣いた　（富山市）松田　梨子

同居する父の介護を五年せし我に同居の子は居らず老ゆ　（四国中央市）石川　明憲

沼酸槐と和名に書けばまるで魔女の秘薬の妖しさブルーベリーは　（光市）永井すず恵

しらみだらけの軍服脱ぎ全裸となり骨皮となりて父は帰りぬ　（本庄市）斉藤喜久子

沢蟹は黒潮に乗り旅をする屋久島を出て伊豆の地にまで　（八千代市）砂川　壮一

胃カメラを飲みつつ思う父親が癌になった日母が泣いた日　（関市）武藤　修

字余りのようなものだと医者笑う虫垂炎を痛がる吾に　（豊川市）石黒　永一

【評】第一首は二月六日になくなられた小澤征爾さんの追悼。簡潔すぎるくらいのまとめ方だが、いちはやく口を衝いて出た言葉に力がある。第二首は五十一歳の葛西紀明さんの国内大会での優勝。第三首の能登の球児など感銘深い。

佐佐木幸綱選

ヴィヴァルディの「四季」を指揮する小澤氏の魔法の手から春がはじまる（藤沢市）河本おりえ

無鉄砲やった時代が宝なり「世界のオザワ」春風に乗る　（埼玉県）とやてるき

日本橋から埼玉が見えし敗戦後能登の地震のいまにかさなる　（横浜市）小林貴以子

臓物のはみ出すごとく家具吐きし家屋の呻くこゑする通り　（羽咋市）北野みや子

「あと十分」捜索終了告げる声寒天に響く倒壊現場　（石川県）瀧上　裕幸

海苔舟の吃水深く帰り来る有明海の光の道を　（霧島市）内村としお

駅前の広場に能登の牡蠣小屋が臨時に出来てラッシュの賑わい　（三郷市）木村　義熙

新しき地図買いにゆく新しき生活始める子の住む町の　（高槻市）藤本恵理子

信濃川を校歌に誇るふるさとの小学校がまた一つ消ゆ　（東京都）庭野　治男

白樺の根方に古き辞書を埋め学寮去りぬ帰国の朝に　（羽村市）竹田　元子

【評】第一、二首、今週は、二月六日に他界した小澤征爾氏追悼の作がたくさんあった。その中の二首。第三首、高い建物等がすべて消滅した太平洋戦争直後の思い出の風景の表現に注目する。第四、五首、能登地震を体験した作者ならではの二首。

高野公彦選

大江亡く小澤も逝きたり日本の自由と知性の先達恋し　（町田市）若山　哲男

揺すらるる心の場所は違へども亜紀もよしして征爾素晴らし　（東京都）上田　国博

ラジオからどじょっこふなっこの唄流れ朝の厨に菜花を洗う　（町田市）山田　道子

庭に咲く梅、水仙を胸元に棺の母は春の香まとう　（福山市）倉田ひろみ

ガザの子はハマスの後継者と決めて銃を向けるかネタニヤフらは（近江八幡市）寺下　吉則

コンビニもスーパーもないインドの旅小規模店を守るためらし　（八尾市）西口　初栄

集まりし人らはスマホばかり見るこんなに広い自然公園　（川越市）大野宥之介

寒雨過ぎしモノトーンの帰路見上げれば我にも伸びる天使の梯子　（相模原市）石井　裕乃

レアらしいハートの形のグミ一粒ためらわず「ママ、あげる」と言う子（奈良市）山添　聖子

波の音波のころがす石の音遍路寝かさず土佐の夜更くる　（徳島市）清水　君平

【評】一首目・二首目、世界的な指揮者の逝去を惜しむ。有能な人々が次々と世を去るので、論語の言葉「逝く者はかくの如きか、昼夜を舎かず」が思い出される。三首目・四首目は季節感のある歌だが、一方は喜びの春、一方は哀しみの春。

永田和宏選

あの朝もあなたの歌を新聞に探していたり逝去を知らず　（滝沢市）越前谷洋子

地下鉄に小澤征爾をわれは見きバックパックの歩みつよかりき　（逗子市）織立　敏博

指揮台のオザワの瞳を見るために舞台後方席を選びぬ　（八尾市）水野　一也

上川氏よちくりと言ってほしかった夜明けは遠いぐらいの皮肉　（嘉麻市）野見山弘子

「はがやしい」朝市あつた焼け跡に両手を合はすひとりの女性　（鹿嶋市）大熊佳世子

白魚の動きて影の生まれるを猫と一緒に目で追ひにけり　（厚木市）北村　純一

大いなる風花受けて湖岸ゆく天浜線の一両電車は　（浜松市）久野　茂樹

死産した子牛の四肢にロープ掛け引き出す父見て獣医を継がず　（姫路市）箭吹　征一

あればよしなくてもいいがやはり欲し友の異論と鍋の春菊　（名古屋市）山守　美紀

旅先で近所の人に会ったよう朝日の常連さんの名他紙に　（上越市）大堀　みき

【評】長尾幹也さんが亡くなった。病と闘いながら、最後は視線入力で投稿を続け、本欄の読者に生きるということの意味と大切さを問い続けた。越前谷さんのように、毎週その歌を探しておられた人も多かった筈。小澤征爾追悼歌も多かった。

風信

大松達知歌集「ばんじろう」　歌誌「コスモス」選者で教員の著者による第6歌集。〈がんばれるようにがんばりますと言って来なくなりたり月曜日から〉（六花書林・2750円）

楠誓英歌集「薄明穹」　神戸に生まれ育ち、いまも暮らし続ける著者の第3歌集。〈階段は途切れて鳥ととびたてば須磨の海ゆく帆船の見ゆ〉（短歌研究社・2310円）

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。